

## 第四波羅夷法の因縁譚における「大賊」

李 薇

波羅夷法第四条は妄説得上人法戒である。これは自分が根拠もなしに上人法を得たと嘘をつくならば波羅夷罪になる、という規定である。

パーリ律の妄説得上人法戒因縁譚では、世尊は妄語した比丘たちに対して、五大賊を取り上げて、お前たちこそが最大の賊であると叱った。この大賊の記述は『四分律』、『五分律』、『十誦律』、『根本説一切有部律』にも見られ、『摩訶僧祇律』には見当たらない。大賊の記述について、平川彰（1993）はパーリ律、『五分律』、『十誦律』の三律は合致すると説いているが、各律間の違いについては言及していない<sup>(1)</sup>。

本論文では、大賊の記述を詳しく説明し、その中の第一大賊について考察する。

### 1. 各律の大賊の内容

まずは、上座部の五部広律、すなわちパーリ律、『四分律』、『五分律』、『十誦律』、『根本説一切有部律』に書かれている大賊記述を取り上げる。

パーリ律で述べられているのは、①百人或いは千人の信者に囲まれて、供養を受ける悪比丘、②如来が説いた法と律を学び、自己のものとする悪比丘、③清浄の梵行者を誹謗する悪比丘、④サンガの重資具を居士たちに与え、おべっかを言う悪比丘、⑤妄説得上人法戒を犯す悪比丘、という五つの悪比丘である。

pañc' ime bhikkhave mahācorā santo saṃvijjāmānā lokasmiṃ. katame pañca. idha bhikkhave ekaccassa mahācorassa evaṃ hoti: kudāssu nāmāhaṃ satena vāsahassena vā

parivuto gāmanigamarājadhānīsu āhiṇḍissāmi hananto ghātento chindanto chedāpento  
 pacanto pacāpento 'ti. so aparena samayena satena vā sahasseṇa vā parivuto  
 gāmanigamarājadhānīsu ahiṇḍati hananto ghātento chindanto chedāpento pacanto  
 pacāpento. evaṃ eva kho bhikkhave idhekaccassa pāpabhikkhuno evaṃ hoti: kudāssu  
 nāmāhaṃ satena vā sahasseṇa vā parivuto gāmanigamarājadhānīsu cārikaṃ carissāmi  
 sakkato garukato mānito pūjito apacito gahaṭṭhānaṃ c' eva pabbajitānaṃ ca lābhī  
 cīvarapiṇḍapātasenāsanagilānapaccayabh esajjaparikkhārānaṃ ti. so aparena samayena  
 satena vā sahasseṇa vā parivuto gāmanigamarājadhānīsu cārikaṃ carati sakkato  
 garukato mānito pūjito apacito gahaṭṭhānaṃ c' eva pabbajitānaṃ ca lābhī  
 cīvarapiṇḍapātasenāsanagilānappa ccayabhesajjaparikkhārānaṃ. ayaṃ bhikkhave  
 paṭhamo mahācoro santo saṃvijjamāno lokasmiṃ. puna ca paraṃ bhikkhave idh'  
 ekacco pāpabhikkhu tathāgatappaveditaṃ dhammavinayaṃ pariyāpuṇitvā attano harati.  
 ayaṃ bhikkhave dutiyo mahācoro santo saṃvijjamāno lokasmiṃ. puna ca paraṃ  
 bhikkhave idh' ekacco pāpabhikkhu suddhaṃ brahmacāriṃ parisuddhaṃ  
 brahmacariyaṃ carantaṃ amūlakena abrahmacariyena anuddhaṃseti. ayaṃ bhikkhave  
 tatiyo mahācoro santo saṃvijjamāno lokasmiṃ. puna ca paraṃ bhikkhave idh' ekacco  
 pāpabhikkhu yāni tāni saṃghassa garubhaṇḍāni garuparikkhārāni seyyath' īdaṃ ārāmo  
 ārāmaṇatthu vihāro vihāravatthu mañco pīṭhaṃ bhisī bimbohanaṃ lohakumbhī  
 lohabhāṇako lohavārako lohakaṭṭhaṃ vāsī pharasu kuṭṭhārī kuddālo nikhādanaṃ vallī  
 veḷu muñjaṃ babbajaṃ tiṇaṃ mattikā dārubhaṇḍaṃ mattikābhaṇḍaṃ, tehi gihī  
 saṃgaṇhāti upalāpeti. ayaṃ bhikkhave catuttho mahācoro santo saṃvijjamāno  
 lokasmiṃ. sadevake bhikkhave loka samārake sabrahmake sassamaṇabrāhmaṇiṇi  
 pajāya sadevamanussāya ayaṃ aggo mahācoro yo asantaṃ abhūtaṃ  
 uttarimanussadhammaṃ ullapati. taṃ kissa hetu. theyyāya vo bhikkhave raṭṭhapiṇḍo  
 bhutto 'ti. (Vin III, 89-90)

〔訳〕比丘たちよ、世間に五種の大賊がおり、存在している。何をもって五となるのか。比丘たちよ、ここに一種の大賊がいて、このように〔思う〕。「私

は実に、百の人によって或いは千の人によって、囲まれ、殺し殺させ、切り切らせ、苦しみ苦しめさせつつ、村、町、首都を徘徊するでしょう」と。彼はその後、百の人によって或いは千の人によって、囲まれ、殺し殺させ、切り切らせ、苦しみ苦しめさせつつ、村、町、首都を徘徊する。このように、比丘たちよ、ここに一人の悪比丘がいて、このように〔思う〕。「私は実に、百の人によって或いは千の人によって、囲まれ、尊重され、重んじられ、尊敬され、供養され、崇拜されつつ、居士たち及び出家者の衣服、食、房舎、病藥資具病資具〔の受者として〕村、町、首都を遊行するでしょう」と。彼はその後において百の人によって或いは千の人によって、囲まれ、尊重され、重んじられ、尊敬され、供養され、崇拜されつつ、居士たち及び出家者の衣服、食、房舎、病藥資具病資具〔の受者として〕村、町、首都を遊行する。比丘たちよ、これは世間に存在する第一の大賊である。

また、比丘たちよ、ここに他の一種の悪比丘がいて、如來が説いた法と律を学んで、自己のものとする。比丘たちよ、これは世間に存在する第二の大賊である。

また、比丘たちよ、ここに他の一種の悪比丘がいて、清浄なる梵行者の完全に清浄な梵行を修行していることを、無根なる非梵行によって誹謗する。比丘たちよ、これは世間に存在する第三の大賊である。

また、比丘たちよ、ここに他の一種の悪比丘がいて、サンガの重物、重資具を、例えば園、園地、精舎、精舎地、臥床、坐床、褥、枕、銅瓶、銅甕、銅壺、銅花瓶、剃刀、斧、斤、鋤、鍬、鋸、蔓草、竹、文若草、婆婆草、草、土、木具、土器等を、これらをもって、居士たちに与え、おべっかを言う。比丘たちよ、これは世間に存在する第四の大賊である。

比丘よ、天界、魔界、梵天界を含む世間において、沙門と婆羅門、天と人類を含める者たちにおいて、実際にもっていない上人法を説く者は最大の賊である。なぜなら。比丘たちよ、盗心をもって国の布施物を食べるからである。

次に『四分律』では、賊に関する記述が二箇所ある。一つは妄説得上人法戒因縁譚にあり、もう一つは59巻の「毘尼増一」にある。

妄説得上人法戒因縁譚には、二種類の賊が書かれている。①浄行していないのに浄行していると偽る比丘と、②食べ物のために妄説得上人法戒を犯した比丘である。

第59巻「毘尼増一」には四種類の大賊になっている。①百人に囲まれ、城を破る賊のような、百人或いは千人の信者に囲まれて、遊行する惡比丘、②浄行していないのに浄行していると偽る比丘、③食欲のために妄説得上人法戒を犯す比丘、④サンガの物を自分が生きるために使う比丘である。この中、②と③は『四分律』妄説得上人法戒の經分別と共通であり、①③④はパーリ律と同じである。

#### 『四分律』妄説得上人法戒

時世尊告諸比丘。世有二賊。一者實非浄行自稱浄行。二者爲口腹故不眞實非己有。在大衆中故作妄語。自稱言。我得上人法是中爲口腹故不眞實非己有。於大衆中故妄語自稱言我得上人法者最上大賊。何以故以盜受人飲食故。(T22, 578a)

〔訳〕時に、世尊は比丘たちに告ぐ。世間に二種類の賊がいる。一つには浄行していないのに自ら浄行をしたと言う〔賊である〕。二つには食べ物のため、大衆に向かって、眞実ではなく、自分がもっていないのに、故意に「私は上人法を得た」と妄語する。このような人は最上の大賊である。なぜなら、供養者からの供養物を盗んだからである。

#### 『四分律』第59巻「毘尼増一」

有四大賊。何等四。或有大賊。生如人意。若得百人千人破某甲城邑。於異時得百人千人。破彼城邑。如是惡比丘作是念。我何處當得百人衆千人衆。於某甲城邑遊行。彼於異時。得百人若千人遊行彼城邑。是爲第一大賊。復次有

大賊。非淨行自言是淨行。是爲第二大賊。復次有大賊。以口腹故。不眞實非已有。於大衆中故作妄語。自稱得上人法。是爲第三大賊。復有大賊。以僧華菓果蓏。以自活命。是爲第四大賊。(T22, 1002a4)

〔訳〕四種の大賊がある。もし百人或いは千人を得て、ある城或いは邑を破ろうと思い、その後、百人或いは千人を得て、ある城或いは邑を破る。悪比丘もこのように、私はどこかで百人或いは千人を得て、ある城或いは邑で遊行しようと思う。その後、百人或いは千人を得て、ある城或いは邑で遊行する。これは第一大賊である。また、非淨行であるのに淨行であるという者は第二大賊である。また口腹のため、眞実でなく自分がもってないのに、大衆の中に、故意に妄語をし、自ら上人法を得たと言う。これは第三大賊である。また、サンガの華、葉、果をもって、自分〔の物とし、自分の〕命を活かす。これは第四大賊である。

『五分律』には、五種類の大賊が書かれている。①百人或いは千人の主であり、城を破る賊、②遊行し、邪命說法する悪比丘、③仏が説いた法を自分のものとする悪比丘、④梵行しないのに梵行すると偽る悪比丘、⑤供養のために妄語する悪比丘、である。このうち、③④⑤は『四分律』、パーリ律にも見られる。

#### 『五分律』妄説得上人法戒因縁譚

諸比丘世間有五大賊。一者作百人至千人主破城聚落害人取物。二者有悪比丘將諸比丘遊行人間邪命說法。三者有悪比丘於佛所說法自稱是我所造。四者有悪比丘不修梵行自言我修梵行。五者有悪比丘爲利養故空無過人法自稱我得。此第五賊。名爲一切世間天人魔梵沙門婆羅門中之最大賊。(T22, 9b)

〔訳〕諸々の比丘よ、世間に五種の大賊がある。一は、百人乃至千人の主となし、城、聚落を破って、人を害し、物を取る〔大賊である〕。二は、悪比丘は諸々の比丘をもって、人間で遊行し、邪命說法する〔大賊である〕。三は、悪比丘は佛が説いた法が私が造ったものであると自ら言う〔大賊であ

る〕。四は、惡比丘は梵行を修せず、自ら私は梵行を修すると言う〔大賊である〕。五は、惡比丘は利養のため、故意にもってない過人法を私が得たと自ら言う〔大賊である〕。この第五賊は、一切の世間、天、人、魔、梵、沙門、婆羅門の中の最大の賊である。

『十誦律』は、『四分律』と同じく、賊に関する記述が二箇所ある。一つは妄說得上人法戒因緣譚にあり、もう一つは第50巻の「増一法」にある。『十誦律』の妄說得上人法戒因緣譚には、三種類の賊が述べられている。①百人乃至五百人の首領として、城或いは集落を破る世間賊、②四方サンガの食物を自分のために売ったり居士に与えたりする惡比丘、③飲食のため妄語する惡比丘である。

#### 『十誦律』妄說得上人法戒

世間有三種大賊。一者作百人主故在百人前百人恭敬圍繞。二百三百四百五百人主故在五百人前五百人恭敬圍繞。入城聚落穿踰牆壁斷道偷奪破城殺人是名初世間大賊。二者有比丘。用四方衆僧園林中竹木根莖枝葉花果財物飲食。賣以自活若與知識白衣。是名第二世間大賊。三者有比丘。爲飲食供養故。空無過人聖法。故作妄語自說言得。若與百人恭敬圍繞。至五百人恭敬圍繞。入城聚落受他供養前食後食怛鉢那。是名第三世間大賊。是中百人賊主。在百人前恭敬圍繞。二百三百四百五百人主。在五百人前恭敬圍繞。入城聚落穿踰牆壁斷道偷奪破城殺人。此名小賊。若有比丘。用四方衆僧園林中竹木根莖枝葉花果財物飲食。賣以自活若與知識白衣。是亦小賊。佛言。是第三賊。於天人世間魔界梵世沙門婆羅門天人衆中。最是大賊。謂爲飲食故。空無過人法。故作妄語自說言得。若與百人至五百人恭敬圍繞。入城聚落受他供養前食後食怛鉢那。是名大賊。(T23, 12a13)

〔訳〕世間で三種の大賊がある。一は百人の主であるので、百人の前に百人によって恭敬され取り囲まれている。二百、三百、四百、五百人の主であるので、五百人の前に、五百人によって恭敬され取り囲まれている。城、聚

落に入り、壁を掘り開いて、道を断ち切り、盗み、城を破って、人を殺す。これは初めの世間の大賊である。二は、比丘が四方サンガの園林の中の竹、木、根茎、枝、葉、花、果、財物、飲食をもって、売る。これによって自ら命を生かす、或いは知識の在家者に与える。これは第二の世間の大賊である。三は、比丘が飲食、供養のため、実際にもっていない過人聖法を、故意に妄語をし、自ら得たと言う。もし百人によって恭敬され取り囲まれる、乃至五百人によって恭敬され取り囲まれている。城、聚落に入り、他〔人からの〕供養する前食、後食、怛鉢那 (tarpana、乳粥のような食べ物) を受け取る。これは第三の世間の大賊である。この百人の賊の主は、百人の前に恭敬され取り囲まれている。二百、三百、四百、五百人の主であるので、五百人の前に、恭敬され取り囲まれている。城、聚落に入り、壁を掘り開いて、道を断ち切り、偷盗し、城を破って、殺人する。これは小賊である。比丘が四方サンガの園林の中の竹、木、根茎、枝、葉、花、果、財物、飲食をもって、売って、自らの命を生かす、或いは知識の在家者に与える。これは小賊である。仏が言う。この第三賊は、天人の世間、魔界、梵世、沙門、婆羅門、天人衆の中の最大の賊である。すなわち、飲食のため、実際にもっていない過人聖法を、故意に妄語をし、自ら得たと言う。百人によって恭敬され取り囲まれる、乃至五百人によって恭敬され取り囲まれている。城、聚落に入り、他〔人から〕供養する前食、後食、怛鉢那を受け取る。これは大賊である。

『十誦律』第50巻「増一法」には五種類の賊の記述がある。その中で、①②③の三種類の大賊の内容は省略され、「先説の如く」(如先説)という語が書かれている。この「先説」は妄説得上人法戒の三種類の賊説を意味すると考えられる。つまり、『十誦律』の五種類賊の記述は上記の三種類賊の上に、④沙門ではないのに沙門と自称し、梵行しないのに梵行すると自称する比丘と、⑤仏の説を自分が説いたものとする比丘、という二つの種類が加えられている。

## 『十誦律』第50卷「増一法」

有五大賊世間希有。何等五。一者作百人主。二百三百四百五百人主。如先說。是名初大賊。復有大賊。用四方僧物。如先說。是名第二大賊。復有大賊。爲飲食故妄語。如先說。是名第三大賊。復有大賊。破戒弊惡內爛流出。非沙門自言沙門。非梵行自言梵行。是名第四大賊。復有大賊。若有佛所說。若聲聞所說。仙人所說。諸天所說。化人所說。從彼聞已。自言我說。有人言是持戒人得須陀洹。答言實爾。或默然受。是名第五大賊。(T23, 364a)

〔訳〕五種の大賊は世間に稀有である。一は、大賊は百人の主となす。二百、三百、四百、五百人の主、〔詳細は〕前に説いたようである。これは初の大賊である。また、大賊は四方サンガの物を用いる、〔詳細は〕前に説いたようである。これは第二の大賊である。また、大賊は飲食のため故意に妄語する、〔詳細は〕前に説いたようである。これは第三の大賊である。また、大賊は破戒し、悪〔のことをし〕、内にくさった〔ものが〕流出し、沙門でないのに自ら沙門であると言い、梵行を修していないのに自ら梵行を修すると言う。これは第四の大賊である。また、大賊は仏が説いたこと、声聞が説いたこと、仙人が説いたこと、諸々の天が説いたこと、化人が説いたことを聞いて、自ら〔これらは〕私が説いたものであると言う。他人はこの持戒する人は須陀洹を得ると言って、〔比丘が〕そうであると答える或いは黙って受け取る。これは第五の大賊である。

「根本説一切有部律」では『十誦律』の妄説得上人法戒因縁譚と同じく、三種類の賊が述べられている。内容も同じく、①百人乃至千人をの率いて、城或いは集落を破る世間の大賊、②四方サンガの食物を自分のために売ったり居士に与えたりする悪比丘、③飲食のため妄語する悪比丘である。

## 「根本説一切有部律」妄説得上人法戒

汝諸苾芻應知世間有三大大賊。云何爲三諸苾芻如有大賊。若百衆若干衆若



百千衆。便往到彼城邑聚落。穿牆解鑰偷盜他物。或時斷路傷殺。或時放火燒村。或破王庫藏。或劫掠城坊。是名第一大賊住在世間。諸苾芻如有大賊。無百衆無千衆無百千衆。不往城邑聚落穿牆解鑰偷盜他物。亦不斷路燒村破王庫藏等。然取僧祇薪草花果及竹木等。賣已自活或與餘人。是名第二大賊住在世間。又諸苾芻有其大賊。無百衆無千衆無百千衆。不往城邑聚落穿牆解鑰偷盜他物。乃至不取僧祇草等活命與人。然於自身實未證得上人之法。妄說已有。是名第三大賊住在世間。汝諸苾芻第一大賊第二大賊。不名大賊。是名小賊。汝諸苾芻。若實無上人之法自稱得者。於人天魔梵沙門婆羅門中。是極大賊。(T23, 675c; Derge. Ca. 182a7-183a5; Peking. Che. 165b5-166b3.)

〔訳〕比丘たちよ、世間に三種の大賊があると知るべきである。大賊は、百人或いは千人或いは百千人〔に囲まれ〕、城、邑、聚落に行つて、牆を掘り開いて、鍵を開け、他人の物を盗み、或いは時に路を断ち切る、人を傷つけ、殺す。或いは火を付けて、村を燃やす。或いは王の庫藏を破る、或いは城坊をおどして奪い取る。これは世間の第一大賊である。また、百人或いは千人或いは百千人〔に囲まれ〕ず、城、邑、聚落に行かず、壁を掘り開かず、鍵を開けず、他人の物を盗まず、或いは時に路を断ち切らず、村を燃やさず、或いは王の倉庫を破ることなどをしない、しかし、サンガの薪、草、花、果及び竹、木などを取つて、売つて、自分〔の命〕を活かす或いは他の人に与える。これは世間の第二大賊である。また、百人或いは千人或いは百千人〔に囲まれ〕ず、城、邑、聚落に行かず、壁を掘り開かず、鍵を開けず、他人の物を盗まず、乃至サンガの草などを、〔自分の〕命を活かす或いは余の人に与えるため、取らない。しかし、自身が実にな上人法を証得していないのに、すでに得たと妄説する。これは世間の第三大賊である。比丘たちよ、第一大賊と第二大賊は大賊と名付けなく、小賊である。比丘たちよ、もし實にな上人法がないのに、自ら得たと言う者は、人、天、魔、梵、沙門、婆羅門の中において、極の大賊である。

以上のことを整理する。

- (1). 『四分律』と『十誦律』には、大賊の記述が二箇所が存在する。『四分律』では妄説得上人法戒の因縁譚と第59巻、『十誦律』では、妄説得上人法戒因縁譚と第50巻にある。
- (2). 律によって、大賊の種類の数が異なっている。パーリ律妄説得上人法戒因縁譚、『五分律』妄説得上人法戒因縁譚、『十誦律』第50巻では五大賊が書かれている。『四分律』第59巻には四大賊がある。『十誦律』妄説得上人法戒因縁譚、「根本説一切有部律」妄説得上人法戒因縁譚には三大賊があり、『四分律』妄説得上人法戒因縁譚には二大賊、『摩訶僧祇律』には大賊の記述が見当たらない。
- (3). 内容的には、各律とも合致する点が多いが、(大賊の種類数及び内容)最も相似するのはパーリ律妄説得上人法戒因縁譚と『十誦律』第50巻「増一法」の記述である。しかし、異なる点もある。それは第一大賊の記述である。ここで第一大賊について詳細に考察する。

## 2. 第一大賊の記述

第一大賊の記述について、問題となるのは第一大賊が悪比丘を意味しているか否かということである。

パーリ律の第一大賊の前半部分には、百人或いは千人を率いて、殺人などの行為をする世間賊の話(以下Aと表示する)が説かれている。この世間賊の話に基づいて、百人或いは千人によって、尊敬され、供養される悪比丘の話(以下Bと表示する)が作られ、後半部分に書かれている。第一大賊は悪比丘である。

比丘たちよ、世間に五種の大賊がおり、存在している。何をもって五となるのか。比丘たちよ、ここに一種の大賊がいて、このように〔思う〕。「私は実に、百の人によって或いは千の人によって、囲まれ、殺し殺させ、切り切らせ、苦

しみ苦しめさせつつ、村、町、首都を徘徊するでしょう」と。彼はその後、百の人によって或いは千の人によって、囲まれ、殺し殺させ、切り切らせ、苦しめ苦しめさせつつ、村、町、首都を徘徊する。このように、比丘たちよ、ここに一人の悪比丘がいて、このように〔思う〕。「私は実に、百の人によって或いは千の人によって、囲まれ、尊重され、重んじられ、尊敬され、供養され、崇拝されつつ、居士たち及び出家者の衣服、食、房舎、病薬資具病資具〔の受者として〕村、町、首都を遊行するでしょう」と。彼はその後において百の人によって或いは千の人によって、囲まれ、尊重され、重んじられ、尊敬され、供養され、崇拝されつつ、居士たち及び出家者の衣服、食、房舎、病薬資具病資具〔の受者として〕村、町、首都を遊行する。比丘たちよ、これは世間に存在する第一の大賊である。

これと類似するのは、前に紹介した『四分律』第59巻における第一大賊の記述である。ここにも、まず百人或いは千人を得て、城を破る世間賊の話（A）が書かれ、その後、この世間賊と同じように、百人或いは千人を得て、城で遊行する悪比丘の話が書かれている。以下の通りである。

『四分律』第59巻 「毘尼増一」

〔訳〕もし百人或いは千人を得て、ある城或いは邑を破ろうと思い、その後、百人或いは千人を得て、ある城或いは邑を破る。悪比丘もこのように、私はどこかで百人或いは千人を得て、ある城或いは邑で遊行しようと思う。その後、百人或いは千人を得て、ある城或いは邑で遊行する。これは第一大賊である。

以上、兩律には、悪比丘が第一大賊であると説かれている。また、パーリ律の注釈書 *Samantapāsādikā* にも同じ趣旨の文章がある。

iti bāhirakacoram dassetvā tena sadise sāsane pañca mahācore dassetum evam eva  
kho ti ādim āha. (Sp II, 482)

外なる大賊 (bāhirakamahācora) を示して、それと類似した、教えにおける  
五種の大賊を示す<sup>(2)</sup>。

ここにある「外なる大賊」というのは、パーリ律に書かれている世間の大賊  
(A) を意味している。そして、五大賊はこの世間の大賊と類似し、仏教の教  
えにおける五種の悪比丘であると *Samantapāsādikā* は説いている。つまり、  
*Samantapāsādikā* によっても、第一大賊は悪比丘を意味している。

しかし、『五分律』、「根本説一切有部律」はパーリ律と *Samantapāsādikā* と  
異なる。第一大賊は比丘ではなく、世間賊 (A) になっている。パーリ律の第  
一大賊の前半部分に当てはまる。

#### 『五分律』

〔訳〕一は、百人乃至千人の主となし、城、聚落を破って、人を害し、物  
を取る〔大賊である〕。

#### 「根本説一切有部律」

大賊は、百人或いは千人或いは百千人〔に囲まれ〕、城、邑、聚落に行って、  
牆を掘り開いて、鍵を開け、他人の物を盗み、或いは時に路を断ち切る、人  
を傷つけ、殺す。或いは火を付けて、村を燃やす。或いは王の庫藏を破る、  
或いは城坊をおどして奪いとる。これは世間の第一大賊である。

これらの第一大賊の内容から、上記の資料を以下のように分類することがで  
きる。

#### グループ1：パーリ律、『四分律』第59巻

このグループの第一大賊の記述は世間賊の話 (A) と悪比丘の話 (B) によっ

て、構成されている（A + B）。第一大賊は悪比丘である。

グループ2：『五分律』、「根本説一切有部律」

このグループの第一大賊の記述は世間賊（A）のみである。第一大賊は悪比丘ではなく、世間賊である。

### 3. 『十誦律』の大賊の記述について

『十誦律』は上記の各律と異なるので、ここで詳細に説明する。『十誦律』の第一大賊は以下の通りである。

『十誦律』妄説得上人法戒因縁譚の第一大賊

一は百人の主であるので、百人の前に百人によって恭敬され取り囲まれている。二百、三百、四百、五百人の主であるので、五百人の前に、五百人によって恭敬され取り囲まれている。城、聚落に入り、牆壁を掘り開いて、道を断ち切り、盗み、城を破って、人を殺すのが初めの世間の大賊である。

この記述によると、『十誦律』の第一大賊は世間賊の話（A）だけが示され、グループ2に属するはずであるが、問題となるのはグループ1の悪比丘の話（B）と類似する表現が、同じ箇所第三大賊の中に見られることである。そして、この類似する表現は後から第三大賊に挿入されたと考えられる。第三大賊の記述を見してみる（類似する表現は下線の箇所にある）。

第三大賊

三は、比丘が飲食、供養のため、もってない過人聖法を、故意に妄語をし、自ら得たと言う。もし百人によって恭敬され取り囲まれる、乃至五百人によって恭敬され取り囲まれている。城、聚落に入り、他〔人から〕供養される前食、後食、怛鉢那を受け取る。これは第三の世間の大賊である。（下線は引用者より）

この第三大賊は供養のために、実際にもっていない上人法を得たと妄語する最大の大賊である。他律にも同様の<sup>1</sup>大賊があるが、『十誦律』と対照して見ると、他律には下線部分の表現が見当たらず、『十誦律』のみにこの記述がある。他律の対応する記述は以下の通りである。

#### パーリ律

比丘よ、天界、魔界、梵天界を含む世間において、沙門と婆羅門、天と人類を含める者たちにおいて、実際にもっていない上人法を説く者は最大の大賊である。なぜなら。比丘たちよ、盗心をもって国の布施物を食べるからである。

#### 『四分律』妄説得上人法戒因縁譚

二つには食べ物のため、大衆に向かって、真実ではなく、自分がもっていないのに、故意に「私は上人法を得た」と妄語する。このような人は最上の大賊である。なぜなら、供養者からの供養物を盗んだからである。

#### 『五分律』妄説得上人法戒因縁譚

五は、悪比丘は利養（利益）のため、故意にもっていない過人法を私が得たと自ら言う〔大賊である〕。この第五賊は、一切の世間、天、人、魔、梵、沙門、婆羅門の中の最大の大賊である。

#### 「根本説一切有部律」妄説得上人法戒因縁譚

比丘たちよ、もし実際に上人法がないのに、自ら得たと言う者は、人、天、魔、梵、沙門、婆羅門の中において、大賊の極みである。

また、この下線部分の表現は『十誦律』の第一大賊の記述と合致し、明らかにの第一大賊の記述（グループ1の世間賊Aに当てはまる）に基づいて作ら

れたものと思われる。前述のように、グループ1の第一大賊の記述は、世間賊の話（A）と悪比丘の話（B）によって構成されている。その中では、悪比丘の話（B）は世間賊の話（A）に基づいて作成されていることがわかる。『十誦律』のこの下線部分の表現も同様に、第一大賊（A）によって作られたと考えられる。以下に、比較しやすいよう『十誦律』の第一大賊と第三大賊を再度併記し、第三大賊の下線部分と合致する第一大賊の記述を波線で示す。

『十誦律』 因縁譚の第三大賊

三者有比丘。爲飲食供養故。空無過人聖法。故作妄語自說言得。若與百人恭敬圍繞。至五百人恭敬圍繞。入城聚落受他供養前食後食恒鉢那。是名第三世間大賊。

『十誦律』 因縁譚の第一大賊

一者作百人主故在百人前百人恭敬圍繞。二百三百四百五百人主故在五百人前五百人恭敬圍繞。入城聚落穿踰牆壁斷道偷奪破城殺人是名初世間大賊。

『十誦律』と同じ構成であるのは『薩婆多部毘尼摩得勒伽』である。『薩婆多部毘尼摩得勒伽』にも五種類の賊が書かれている。内容は『十誦律』の第50巻「増一法」と合致する。『十誦律』と同じく、その中の第一大賊は世間賊の話（A）だけが示されるが、グループ1の悪比丘の話（B）と類似する表現も存在する。しかし、『十誦律』と異なり、第五大賊の末尾に見られる。以下に『薩婆多部毘尼摩得勒伽』の該当部分を記し、類似する表現を下線で示す。

『薩婆多部毘尼摩得勒伽』

復有五種大賊。謂百人百衆圍遶。第一大賊。用四方僧物持與他。第二大賊。自言我是阿羅漢。第三大賊。如來所說甚深空義。而言我說。第四大賊。比丘犯戒。不精進行惡法。膿血内流空形蠱聲。非沙門自言沙門。非梵行自言梵行。

若將百衆二百乃至五百人圍遶。遊行城邑聚落。受諸供養。是第五大賊 (T23, 608c)

〔訳〕 また五種類の大賊がいる。百人或いは百の衆に囲まれるのは第一大賊である。四方サンガのものをもって他人に与える〔比丘〕は第二大賊である。自ら私は阿羅漢であると言う〔比丘は〕第三大賊である。如来が説いた甚深空義を自分が説くものであると言う〔比丘は〕第四大賊である。比丘が戒を犯して、精進せず、悪いことをする、膿血が内に流れている、〔体の中が〕空になり、螺のようである。沙門でないのに自ら沙門であると言い、梵行を修してないのに自ら梵行を修すると言う。百人乃至五百人によって取り囲まれている。城、邑、聚落で遊行する、他〔人から〕供養を受け取る。これは第五大賊である。

つまり、両文献ともグループ1の悪比丘の記述(B)と類似する表現があるが、異なる種類の大賊の末尾に加えられている。しかし、両文献ともに最後の賊に付加される点では一致している。これもまた、この類似する表現が後から挿入された根拠の一つになるのではないか。

よって、『十誦律』(『薩婆多部毘尼摩得勒伽』も同じく)には、悪比丘の記述(B)と類似する表現が元々存在せず、新しく挿入されたものであると考えられる。

そのように考えると、この類似する表現が第三大賊に入れられる前の、すなわち、現在の『十誦律』よりも古い形態の『十誦律』が存在したと想定できる。この古い『十誦律』には、第一大賊は世間賊(A)のみであり、第三大賊にも類似する表現は挿入されていない。その後、類似する表現が最後の第三大賊に挿入され、現在の『十誦律』妄說得人法戒因縁譚における三種類の賊の形ができた。さらに、この三種類の賊の形ができた後に、『十誦律』第50巻「増一法」の五種類の賊の形も新しく導入されたと考えられる。第50巻には、「先説



の如く」(如先説)という語があり、ここの「先説」というのは『十誦律』妄説得上人法戒因縁譚にある三種類の賊を意味している。このことから、第50巻の五種類の賊の記述は妄説得上人法戒因縁譚の三種類の賊の記述より新しく成立したと推察される。つまり、『十誦律』第50巻の五種類の賊の記述は、(B)と類似する表現が新しく挿入された妄説得上人法戒因縁譚にある三種類の賊に、二種類(④と⑤)の大賊が加えられ成立したと言える。

興味深いことに、この『十誦律』第50巻の新しくできた五種類の賊の記述は、パーリ律の五種類の賊の記述と最も類似するのである。以下に整理する。

パーリ律 妄説得上人法戒因縁譚	『十誦律』第50巻 (パーリ律によって順番を調整した)
①百人或いは千人の信者に囲まれる世間賊(A)と同じような悪比丘(B)	①百人乃至五百人の首領として、城或いは集落を破る世間賊(A)
②如来が説いた法と律を学び、自己のものとする悪比丘	⑤仏の説を自分が説いたものとする比丘
③清浄の梵行者を誹謗する悪比丘	④沙門ではないのに沙門と自称し、梵行しないのに梵行すると自称する比丘
④サンガの重資具を居士たちに与え、おべっかを言う悪比丘	②四方サンガの食物を自分のために売ったり居士に与えたりする悪比丘
⑤妄説得上人法戒を犯す悪比丘、という五つの悪比丘である。	③飲食のため妄説得上人法戒を犯す悪比丘(Bと類似する表現が含まれている)

## 4. 第一大賊から見た各律の新古

『十誦律』を加えて、上記の資料をもう一度分類すると、以下のようである。

### グループ1：パーリ律、『四分律』第59巻

このグループの第一大賊の記述は世間賊の話(A)と悪比丘の話(B)によって、構成されている(A + B)。その中のBはAによって作られている。第一大賊は悪比丘である。

### グループ2：『五分律』、「根本説一切有部律」、『十誦律』妄説得上人法戒因縁譚

このグループの第一大賊の記述は世間賊(A)のみである。第一大賊は悪比丘ではなく、世間賊である。

### グループ3：『十誦律』第50巻「増一法」、『薩婆多部毘尼摩得勒伽』

このグループの第一大賊の記述は世間賊(A)のみであるが、Aと類似する表現(B)が他種類の大賊の末尾に見出されている。

この三つのグループの新古順を考察する際には、二つの過程を想定することができる。

- a. グループ1(パーリ律など)が一番古いとするならば、第一大賊は百人の主として世間賊のような悪比丘であることになる(A + B)。そして、グループ2(『五分律』など)の第一大賊の記述には、悪比丘の記述が脱落し、世間大賊だけが残された。グループ3(『十誦律』第50巻「増一法」)もグループ2と同様に、グループ1の形態から、第一大賊の悪比丘の記述が脱落し、世間大賊のみが残された。後に何らかの理由で、この脱落した悪比丘の記述がもう一度新しく挿入された。しかし、第一大賊には入らず、大賊の記述の最末尾に入れられたという変化の過程が想定できる。新旧の順序は以

下のようになる。

グループ 1：パーリ律妄説得上人法戒因縁譚、『四分律』第 59 卷

↓

グループ 2：『五分律』、「根本説一切有部律」、『十誦律』妄説得上人法戒因縁譚

↓

グループ 3：『十誦律』第 50 卷「増一法」、『薩婆多部毘尼摩得勒伽』

- b. グループ 2 が一番古いとするならば、第一大賊には世間賊 (A) だけがあった。後に、悪比丘の記述 (B) が新しく作られ、挿入された。そして、この悪比丘の記述が直接に第一大賊になったのがグループ 1 であり、他の種類の大賊に入れられたのがグループ 3 である。

グループ 2

↙      ↘

グループ 1      グループ 3

現段階では、上記二つの可能性を確定することはできない。確かに、『十誦律』内部の新古関係、すなわち『十誦律』第 50 卷「増一法」の大賊の記述は『十誦律』妄説得上人法戒因縁譚より新しいということが明確である。そして、パーリ律経分別がこの新しい記述と最も類似する。しかし、これを根拠にして、パーリ律の経分別の第一大賊の記述が新しくなる（可能性 b）とは結論づけられないのである。一本の律内部の新古は簡単に他律の成立順に当てはまらないからである。一方、新しく挿入されて、出来た記述（『十誦律』第 50 卷「増一法」）には、他律の影響を受けて古い情報が入る可能性（可能性 a）もあるので、新古を簡単には決定できない。ゆえに、ここではこれらの情報を提示するのみに

留めておく。

### 略号および参考文献

Derge = Derge Edition of the Tibetan Tripiṭaka. Barber, A.W., ed. *The Tibetan Tripiṭaka Taipei Edition*. Taipei: SMC Publishing, 1991.

Peking = Peking Edition of the Tibetan Tripiṭaka. Suzuki Daisetz T., ed. *The Tibetan Tripiṭaka (Peking Edition)*. Tokyo-Kyoto: Tibetan Tripiṭaka Research Institute, 1955-1961.

Sp = *Samantapāsādikā*, Takakusu, J. Nagai, M. ed. 7 vols. London: Pali Text Society. 1924-1947

T = 大正新脩大藏經

Vin = The Vinaya piṭakam, Oldenberg, H. ed. 5 vols. London: Pali Text Society. 1879-1883.

パーリ律 = 南方分別説部で用いられている律藏. テキストは上記の PTS 版.

『四分律』= 『四分律』大正大藏經第 22 卷 (T22. No. 1428)

『五分律』= 『彌沙塞部和醯五分律』大正大藏經第 22 卷 (T22. No. 1421)

『摩訶僧祇律』= 『摩訶僧祇律』大正大藏經第 22 卷 (T22. No. 1425)

『十誦律』= 『十誦律』大正大藏經第 23 卷 (T23. No. 1435)

「根本説一切有部律」= 根本説一切有部系律文献の総称. テキストは大正大藏經 (T23. No.1442-T24. No.1451) を使用

平川彰. 1993. 『二百五十戒の研究 I』, 春秋社.

### 注

(1) 平川 (1993, 306) に参照

(2) 佐々木閑氏・山極伸之氏が個人的な研究会で作成した未定稿を使わせていただいた。